

例数71例,各週の變化はつぎの様である。

〔表略す〕

最高19(1例),最低 8.5(3例),平均 12.84kgの最高増加で,12kg以上の増加例は44例(61.9%),9kg以下のそれは8例(11.3%)である。妊娠成立時の平均体重は48.54,分娩1週後の増加量は3.24kgでともに正常の場合より大きい。体重變化についていえば,スタートは大體正常妊娠と同じだが,14週頃から急に増加していく。

Ⅲ. 双胎妊娠

例数が少ないが,14例についての各週の體重變化はつぎの様である。

〔表略す〕

最高増量19(1例),最低9(2例),5例以上の平均では15.40kgの最高増加で,15kg以上の増加例が5例(35.7%)ある。妊娠成立時平均体重45.04,分娩1週後の増加量2.1kgで正常の場合より小さい。体重増加は妊娠初期から著明で,殊に16週頃から劇しい。

3. 昭和29年6月以降における妊婦尿中ウロビリノーゲン月別陽性率の急激なる上昇の原因に関する考察

(横濱通信) *塚本重彦,龜本静子

昭和28年4月より4年間當院を訪れる全妊婦に対して,尿中ウロビリノーゲン反應を検査してきたが,昭和29年6月以降(+)以上の陽性者が急激なる増加を示し,その後その月別陽性率は昭和29年8月(57%),12月(34%),昭和30年4月(27%),8月(39%),昭和31年1~2月(32%),5月(38%),8月(48%),11月(52%)に明瞭なる山を畫き現在に至っている(括弧内は(+)以上の陽性率)。判定法は新鮮尿約5ccにアルデヒド試薬數滴を加え室温1分以内に判定:無色または橙色を(一),僅微紅色着色を(±),滴下直後真紅着色を(卅),(+)と(卅)との間を(卍)とした。梅毒反應陽性者,スルファミン劑投與者,下痢發熱患者などは検査成績から除外した。すなわち検査対象は大多數正常妊婦であり,少數の妊娠中毒症を含んでいるが,中毒症と本反應陽性者との間には關係が認められない。また當院を訪れる妊婦は神奈川県全般から來院するのであつて,決して横濱の一地區のみに陽性者が出ているわけではない。陽性者中昭和29年7月及び昭和31年8月におのおの2名が黄疸を發したが,他は殆ど明瞭な自覺症はない。またその後協力者の調査により,健康と認められる成人男女及び小學兒童も妊婦の陽性率と殆ど等しい陽性率を示すことが證明された。以上の事實から私は昭和29年6月以降少く

とも神奈川県全般にわたり,軽度ながら肝障礙が廣がっていると推定せざるをえないのである。この原因としてはある特殊なものではなく社會全般に普遍的なものを考えねばならぬことは當然である。私は當初當時學會及び社會上の大問題となつた黄變米を考えたが外米を食べない者にも陽性者が出ていること,及びその後の陽性率の消長からも,黄變米が原因でないことは明瞭であると考ええる。妊娠とも全く關係はない。私が現在最も重視しているのは肝炎ビールスが蔓延しているのか,または原水爆實驗による放射能の影響かという點である。この點の鑑別については現在全く極手がない。私はウ反應陽性率の消長を追ひこれを原水爆實驗の時期または放射能の測定と比較することによつて判定する以外に證明法がないと考え,現在もなおこの検査を續行しているのである。現在までの成績から,米ソの原水爆實驗期から數カ月のずれをもつて陽性率の山が現れる。またこの山は季節に關係なく現れている點も注意されねばならない。これらの點から肝炎ビールスの蔓延が證明されない限り現在の段階において,むしろ放射能の影響と考える方がより合理的であると思われる。放射能の影響であれ,肝炎ビールスの蔓延であれ,あるいはまた他の何らかの原因であれ,何れにしても昭和29年6月以降は社會全般に軽度ながら肝障礙が廣まつている事實をわれわれは忘れてはならない。また原水爆實驗による放射能の影響があるかないかは人類の運命を決する重大問題であるから軽々しい判断は慎むべきであるが,重大なればこそたとえ僅かでもその人體に対する影響を推測せしめるような資料がある以上,われわれはこの問題から眼をそらすことは許されないと考えるものである。

4. 胎盤水溶性物質 PS の血壓上昇作用

(日醫大) *眞柄正直,玉野 豊,

菊地富士男,高橋信夫

われわれは,胎盤水溶性物質 PS について生化學的及び藥理學的に廣汎な研究を行い,またこれが動物臟器に招來する病變についても詳細な實驗を行い,既に數回にわたり發表してきた。

今回は,その血壓上昇作用について詳細に検討するとともに,Rauwolfia Serpentina 製劑の血壓下降作用につき實驗を行い,これらの相互關係について,いささか知見をえた。

〔I〕胎盤水溶性物質 PS の血壓上昇作用についての検討

1) PS の末梢血管に対する作用點について

PSの末梢血管に対する拘縮作用については既に菊地が、Krawkow-Pissemski法による家兎耳殻灌流実験で確認しているが、今回はLäwen-Trendelenburg法による、墓後肢血管灌流実験で再びこれを確認するとともに、各種薬劑を併用する方法でその作用點が、一つには末梢血管壁自體にあることを知った。

2) PSの中樞作用による血管収縮の有無

墓の頭部前肢と、後肢との同時灌流によるSchmidtの方法で、PSには更に中樞性にも血管を収縮させる作用のあることを知った。

3) 家兎について観血的に血圧を測定し、同時に心搏動、呼吸への影響をしらべた実験

ウレタン麻酔家兎におけるPSによる血圧上昇曲線は子癇血清のそれと極めて類似しており、心搏動、呼吸への影響はあまりなかつた。しかし抱水クロラール麻酔家兎では、同様な血圧上昇と共に、心搏動の抑制がみられた。

〔II〕Rauwolfia Serpentina 製劑の血圧下降作用とPSとの相互作用についての知見

使用したもの：Serpasil・Apoplone及びReserpinの各種溶液。

1) Serpentina 連続投與時の長期観察

福田・川口法により家兎の血圧を非観血的に測定したが、投與後3日目頃より緩徐な血圧下降をみ、これは投與中持続した。

2) 家兎について観血的に血圧を測定し、同時に心搏動、呼吸への影響をしらべた実験

ウレタン麻酔家兎及び抱水クロラール麻酔家兎に、Serpentinaを投與し、前者には緩徐なかつ持続的血圧下降をみた。心搏動、呼吸への影響もみられた。またウレタン麻酔家兎に、Serpentinaを投與した後にはPSによる血圧上昇は一過性にしかみられなかつた。子癇血清による血圧上昇も少しく抑制された。

3) 末梢血管への作用

墓後肢灌流実験では、Serpentinaによる血管擴張はない。PSの収縮作用は抑制しない。

4) 中樞作用による血管擴張の有無

Schmidt法によると、Serpentina製劑は、中樞的に血管を擴張させるようであり、PSによる収縮を抑制するようである。

5. 晩期妊娠中毒症に関するその後の研究成績

(熊本大) *加來道隆, 杉山猛治, 安武丑生, 宮崎好信, 中山道男, 井上 浩, 黒木博之,

緒方泰三, 吉田榮太, 内田敬久, 水谷房之, 森田 久, 中川清隆, 中尾七平, 永田秀一, 橋本和雄, 山下 卓, 宮村彌彦, 中村公郎

妊娠中毒症は胎盤多精體様物質(以下KPSと略す)によるアレルギー性病變を主とする疾患であろうということは既に發表したところで、その後も引續き各種の実験を行い發表して來たが、今回はその後の成績を報告する。

I. 妊娠中毒症の本態に関する血清學的研究

1. 人胎盤KPSに對する組織抗體：人胎盤KPS感作家兎の臟器の一部に組織抗體を認めたと、中毒症患者では検討中である。

2. 妊娠中毒症患者血清中の抗體檢索：抗原としてはA法KPSを使用した。宿題報告後昭和29年10月迄の成績はつぎの如くである。①沈降反應：妊娠中毒症患者61例中30例(49.18%)に沈降素價100~3200倍の沈降素を證明し、對照は43例中1例(2.32%)にのみ陽性であつた。②補體結合反應：妊娠中毒症患者61例中12例(19.8%)の血清はKPSとの反應陽性で2~6單位の補體を結合したが、對照例はすべて陰性であつた。その後も今日に至るまで引續き檢索中である。

3. 妊娠中毒症患者の血中補體價：一般にアレルギー性疾患及び實驗的アレルギーでは血中補體價が減少するとされているが、KPSによるアレルギー實驗でも中毒症患者でも減少が認められた。このことは中毒症患者血清中にKPSに對する抗體が存在する事實と相俟つて、生體内で抗體抗原反應が行われていることを示唆するものである。

II. 妊娠中毒症の發生機轉に關連して

1. 子宮及び胎盤の母體側血行について：さきに私は中毒症の發生には子宮胎盤の貧血が重要な役割を果しているのではないかとの假説をのべたが、P³²を用い獨自の方法で檢索し、中毒症患者では胎盤母體血の循環が全身循環あるいは子宮循環よりも著しく障害されているのを認めることが出來た。

2. 素因と妊娠中毒症

高血壓家兎では正常血壓家兎よりも中毒症酷似の病變がえられること及びアレルギー素質と妊娠中毒症發生とは密接な關係があることは既に明かにしたが、さらに高血壓家系、末梢血管系の異常、自律神経系との關連について檢索してみると：①高血壓家系者は正常血壓家系者に比べ中毒症に罹患するものが明かに多い。②皮膚毛細血管像をみるに、一般に妊娠末期になると大部分にある